外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業（Ｈ２１年度・文部科学省指定）

小学校外国語活動推進事業（Ｈ２２年度・岡山県教育委員会指定）

本県では，平成２１年度に，文部科学省から指定を受け，「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」に取り組みました。平成２２年度には，同じ実践研究校において，岡山県教育委員会の指定で，「小学校外国語活動推進事業」に取り組みました。

本事業では，小学校における外国語活動の円滑な導入を図るため，１）「英語ノート」等の教材の効果的な活用方法，２）外国語活動における評価の在り方，３）へき地等の小規模校や複式学級における指導方法，４）学級担任の教員または外国語活動を担当する教員が中心となる指導体制や学級担任等を補助するための体制の在り方等について実践的な取組を推進しました。

その成果と課題をまとめていますので，外国語活動の充実に向け，参考にしてください。

１．実践研究校

次の６校の実践研究校が平成２１・２２年度の２年間で，実践的な研究を行いました。

市町名	学校名	郵便番号	住所
津山市	中正小学校	709-4602	津山市宮部下６８６
玉野市	宇野小学校	706-0011	玉野市宇野２－２３－１
笠岡市	神島外小学校	714-0034	笠岡市神島外浦１６６７－１
真庭市	川上小学校	717-0602	真庭市蒜山上福田８９０－１７
備前市	片上小学校	705-0021	備前市西片上３３５
美咲町	柵原東小学校	708-1511	久米郡美咲町行信１４１－１

２．取組内容

実践研究校においては，以下に示すａからｇに示す事項について実践的な取組を行いました。平成２２年度には，ｆを重点課題として取り組みました。

ａ　文部科学省が作成する小学校における外国語活動のための教材（「英語ノート」，「付属ＣＤ」（音声教材），「英語ノート」指導資料及び「英語ノート」準拠デジタル教材）を活用した授業の実践

ｂ　外国語を通じた，言語や文化についての体験的な理解，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度，外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみなど，コミュニケーション能力の素地に関する評価規準及び評価方法の研究

ｃ　児童の興味・関心等の学習状況の変容に関する定量的な把握及び文部科学省が実施するアンケート等の調査の実施

ｄ　授業の中心となる学級担任等及び校内の他の教員の指導力向上のための取組

ｅ　学級担任等を補助するための外国語指導助手や地域人材等の外部人材の効果的な活用

ｆ　他の小学校や中学校等との連携

ｇ　その他（校内における外国語活動推進体制の構築，地域との連携等）

３．推進協議会

お互いの取組について情報交換し，県教育委員会と実践研究校及びその所管の教育委員会が連携して研究･実践を推進するために，年間２回の推進協議会を開催しました。会議では，各実践研究校の取組報告やテーマを決めての意見交換を行い，京都教育大学　　教授　泉惠美子先生から御助言をいただきました。

平成２２年度の第２回推進協議会は，県内全ての小・中学校を参加対象とした成果発表会とし，２年間の実践研究の報告及び協議により，小中連携も図りました。

（これまでの推進協議会の実施概要）

（１）平成２１年度第１回：　平成２１年８月２０日（木）開催
　①　実践研究校の取組報告（教材の効果的な活用，評価の在り方　等）
　②　意見交換（課題の解決に向けて，校内の推進体制　等）
　③　指導助言・質疑応答

（２）平成２１年度第２回：　平成２２年１月２９日（金）開催
　①　実践研究校の取組報告（取組の成果と課題　等）
　②　意見交換（課題の解決に向けて，中学校との連携，成果の普及方法　等）
　③　指導助言・質疑応答

（３）平成２２年度第１回：　平成２２年８月２７日（金）開催
　①　実践研究校の取組報告（中学校・他の小学校との連携，複式学級における工夫 等）
　②　意見交換（課題の解決に向けて，市町教育委員会の支援　等）
　③　指導助言・質疑応答

（４）平成２２年度第２回：　平成２２年１月２８日（金）開催
　平成２１年度文部科学省指定「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」
　平成２２年度岡山県教育委員会指定「小学校外国語活動推進事業」成果発表会
　①　実践研究校による研究発表・質疑応答
　②　講演　「外国語活動の在り方と中学校英語教育との連携」
　　講師：　京都教育大学　泉　惠美子　教授

～　２年間の指導・助言から　～

○　「英語ノート」等を活用した授業について

・　外国語活動の目標を達成するために，これまでに各校独自で作成した年間指導・評価計画や教材と，「英語ノート」の内容を融合させる必要がある。
・　「英語ノート」は教科書ではないので，全てのページを授業に使う必要はない。そのまま使うと，子どもにとって難しいページもある。教師用指導資料では，１単元約４時間構成になっているが，子どもにとって難しい単元は，例えば６時間をかけてもよい。ただし，中学校との接続の観点から考えると，学習指導要領にある「コミュニケーションの場面」や「コミュニケーションの働き」は全て扱う必要がある。
・　「英語ノート」には，各単元のテーマと使用表現等が示されているが，指導する教員が，活動を工夫することにより，様々な授業展開が可能となる。児童が思わず聞いたり話したくなる自然なコミュニケーションの場面設定と，児童の発達段階に合った興味を引く内容や，意味ある活動を工夫することが大切である。
・　「英語ノート」には，漢字や外来語，日本の年間行事等についても扱われている。日本語や日本文化を大事にすることも必要である。
・　リスニングについては，段階を踏んで指導し，子どもの発話を急がないことが大切である。聞く力は推測する力である。ＡＬＴの話や絵本などまとまった英語を聞かせたい。
・　各授業のめあてを明示すること。時には，各自のめあてをもたせることで，自律した子どもを育てたい。また，１時間の授業の流れが示されていると，子どもにとって

「今，何をすべきか」がよくわかる。

・　デジタルコンテンツは止めながら使うのがポイントである。授業の流れのどの部分で使うことが有効なのかを吟味して使うことが大切である。例えば，ＣＤを止めた際に，“What’s your name? ” “What do you like? ” 等と教師が聞いて，子どもが答えた後に，ＣＤで答えを聞かせながら進めるとよい。

・　アルファベットについては，まとめて指導するのではなく，毎時間，少しずつスパイラルに指導するとよい。ABC song 等を使い，体を使って文字の認識をさせるとよい。また，音韻認識が重要であり，アルファベットジングルなどを用いて英語の音と文字のつながりに対する気づきを与えたい。

・　単元１～２時間目の「聞く」中心の活動と３～４時間目の「発表」の活動の段差が大きくないようにすること。聞いただけでは発表できないので，「聞く」中心の活動と「発表」の橋渡し活動として，口慣らし活動が必要である。カードゲームやチャンツ，歌などで口をついて表現が出るようにする等，丁寧にスモールステップを踏まないと発表の際の成就感がない。復習にたっぷり時間をかけ，新しい場面で，新しい表現を用いて「できる」と思わせるための橋渡し活動を工夫して，アウトプットにつなげること。

・　楽しいゲーム等で，コミュニケーションに必要な表現に慣れるための活動を，全体やペアでしっかり行うこと。

○　学習意欲を高める評価について

・　ねらいの到達を評価できる「評価規準」を設定し，主たる活動と，主たる活動に繋がる活動を考え，授業の流れを計画することが不可欠である。

・　観察，質問紙，インタビュー，ポートフォリオ，自己・相互評価，ロールプレイ，ビデオ録画，パフォーマンス評価，チェックリスト等，多様な方法を用いて継続的・総合的に評価することが大切である。

・　授業中の学習活動の様子を観察し，児童ができたこと，頑張ったことを取り上げ，励ましのある評価，やる気が起こる評価，次につながるプラス評価を心がけること。

・　教師の励ましの言葉として，Good. Excellent. Wonderful. Great. Very good. Good job. Well done. You did a good job. Good try. Close. 等，様々な褒め言葉を使って褒めること。

・　日本語でも良いので，具体的に優れた点を褒めること，個々に褒めること，タイミングをずらさないことが必要である。「自ら学ぶ意欲」や，「声の大きさ」「ジェスチャー」「表情の豊かさ」「アイコンタクト」などの態度面も褒めることにより，子どもの自信につながり，やる気が出て，次の授業の頑張りにつながる。

・　たっぷり練習を積み，成功体験を積ませ，達成感・充実感を得る活動を行った上で，適切な評価を与えることにより，児童へ肯定的なフィードバックをすること。

・　社会的集団における協働の学び(learning through social interaction)において，子ども同士の互いの称賛も重要である。児童と教師，児童同士の良い人間関係や認められたいという気持ちを大切に，相互評価，自己評価を用いて自己肯定感を高める評価をすること。

・　自己評価について，文章でも書かせてほしい。また，教師は，子どもの生の声を次の授業改善につなげてほしい。

・　相手との対話を続けるための工夫等，方略的な能力も見取ってほしい。

・　ポートフォリオは有効であるが，単なるファイルで終わらせないこと。子どもがどのように変容したのか，各自が自分の成長を振り返ることができるようにすること。また，それを教師の形成的評価にも使うこと。

・　グッドバイ・チャレンジも有効である。例えば，授業の終わりに，子どもが振り返りカードを書いている間に，ＡＬＴと２人で子どもに質問し，一人一人の達成度を確

認することは大切である。子どもが教師の質問に，単語で答えたら，シールを右に貼り，フレーズで答えたら左に貼るなどして区別するとよい。

○　**小中連携について**

・　まずは，教員の意識改革が必要である。授業参観を行い，指導内容・方法を互いに理解することから始め，互いに学び合い，吸収し合うことが大切である。例えば，年間指導・評価計画や学習指導案を一緒に作成するとか，教材の共有化・データベース化も効果的である。教員や児童・生徒の交流授業なども有効である。

・　小学校の指導法を中学校に活かすことも大切である。小学校のコミュニケーション中心の楽しい活動や子どもへの支援の在り方等は，中学校で参考にすべきことが多い。

・　中学校の指導法を小学校に活かすことも大切である。インタビュー活動の方法や教室英語の使い方等，中学校教員の専門性から学ぶことが多いはずである。

・　中学校の入門期は，小学校で使用した教材を使用したり，小学校で行ったゲームやチャンツ等の活動を再度行ったりすることも効果的である。

○　**その他**

・　小学校では，コミュニケーション能力の素地を養うので，外国語活動を通して自己肯定感や，英語に対する良い思い出を作らせたい。身近な外来語も英語とは異なることに気付いたり，自分から進んで挨拶ができたりすることが大切である。

・　絵本の読み聞かせは，有効である。外国の文化がわかるような内容のものを選ぶと良い。またシリーズものや外国の教科書も効果的である。歴史・科学等，知的好奇心をくすぐるものを選んだり，音声ＣＤが付いたものもあるので児童が自発的に読んだり聞きたりできる環境が与えられれば良い。

・　学習指導案を作成する際，授業中に教師が使用する英語を全て書き出し，授業のシミュレーションをすることで教員の英語運用能力を高めることができる。

・　５・６年の担任に全てを任せるのではなく，学校全体で推進する体制を校長のリーダーシップのもとで作ること。外国語活動担当者が職員朝礼等で，ワンポイント英会話をするとか，校内研修でＡＬＴによる英語運用能力向上のためのワークショップを行うとかのアイディアも考えられる。

【実践研究校による発表】

【大学教授による講演】

【講演の中でのワークショップ】

４．成果と課題

（成　果）

○　実践研究校では，学級担任が中心となる指導体制や学級担任を補助して学校全体で取り組むための体制が整い，教員の指導力が向上しました。

○　実践研究校では，積極的に授業公開し，互いの授業を分析することにより授業改善を行った結果，アンケートによると，多くの児童が「外国語活動が好き」「英語が使えるようになりたい」「英語は大切だと思う」と回答しています。また，研究成果を県内の学校に普及することにより，県全体の外国語活動における指導力の向上につながり

ました。

○　先進校視察，外部講師を招聘しての実践的な研修や，校内研修・個人研修等により先生方の指導力が向上しました。最初は，戸惑っていた先生方も，研究実践を進めるにしたがい，自信をもって楽しみながら取り組めるようになりました。

○　「英語ノート」とそれ以外の教材を，授業のねらいや活動内容によって効果的に組み合わせて活用しました。

○　評価について，「年間指導・評価計画」を作成し，意図的・計画的に評価を行いました。また，各時間のねらいに応じた評価を適切に行って，その結果については，次の指導に活かしました。

○　小規模校・複式学級における指導方法について，複式学級のA/B年度の年間指導・評価計画を作成し，少人数ならではの個に応じた指導法を確立しました。

○　児童の変容について，文部科学省による教員対象のアンケートでは，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるようになった」「英語に興味・関心をもつ児童が増えた」「国語や他の言語との違いに目を向けるようになった」等，肯定的な回答をしています。

○　岡山県教育委員会は，実践研究校を所管する市町教育委員会と連携・協力し，実践研究に情報提供や学校訪問で助言を行うことにより，実践研究校の指導・評価方法や中学校との連携等に工夫改善が見られました。実践研究校の公開授業，研究発表会には，中学校の先生方も招聘し，中学校との連携についても協議するとともに，成果の普及を図りました。

○　県推進協議会では，実践研究校相互の情報交換や指導・評価の在り方，中学校との連携，少人数学級における個への支援の在り方等に関する検討を行いました。また，学習指導案や年間指導・評価計画の交換を行ったりして，互いの研究・実践の参考となるようにしました。研究２年目の成果発表会は，全県の小・中学校に開催案内を出して，中学校からの参加者にも外国語活動の理解を求め，小中連携を図りました。

（課　題）

●　実践研究校のこれまでの成果を全県に普及することが大切です。

●　評価の在り方については今後さらに研究を進めることが必要です。

●　実践研究校の公開授業や研究協議及び成果発表会に，中学校の先生方も参加して意見交換を行ってきましたが，中学校との連携をさらに進めることが課題です。

（課題の解決に向けて）

◇　県総合教育センターの研修講座では，小学校・中学校を会場にした公開授業参観を伴う研修や英語運用能力向上のための内容も実施しますので，積極的に参加してください。

◇　中学校との連携については，小学校と中学校で互いに授業を参観したり，年間指導・評価計画や学習指導案の交換を行ったりするなど，情報交換を積極的に行ってください。また，小・中学校が互いに協同授業を行うのもお互いの理解を深める上で，効果的です。

◇　平成２３年度から，岡山県教育委員会指定の「外国語教育推進事業」で，３中学校区の実践研究校を指定し，小中連携に関する研究を進めます。公開授業の際は，是非参加して，各校の取組の参考にしてください。